1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第687号（通巻1191号）　定価１部40円

創立1880年 YMCA

東京YMCA

2011 7・8月号　発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562　URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

We build strong kids, strong families, strong communities.　YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

＜特集＞東京ＹＭＣＡの障がい児・者活動

「一緒に生きる」

「手足の不自由な子どものキャンプ」は今年55年目を迎える（２面参照）

ＬＤ支援活動の先駆けとして

明星大学准教授　小貫　悟

東京ＹＭＣＡが本格的に専門家と連携して発達障がいのある子への専門的支援を始めることになったのは１９９５年のことである。その年、堀口廣司氏（現・副総主事）が、新たに国立市にオープンする西東京センターの新事業に位置づけられた「ＬＤのための支援クラス」開設を任されていた。当時の発達障がいの支援について、公教育では、その課題が認知されつつあるものの、現実には、ほとんど組織立った動きがなく、ＹＭＣＡの決断には多くの応援の声が上がったのを覚えている。クラス開設にあたり、まず、ＹＭＣＡのスタッフが十分に発達障がいを理解する必要があり、また、多くの方々にＹＭＣＡの今後の活動を知ってもらうという目的で「理解セミナー」が開催された。講師には上野一彦氏（東京学芸大学教授）、佐々木正美氏（川崎医療福祉大学教授）、牟田悦子氏（成蹊大学教授）（肩書は当時）などをはじめとする我が国を代表する専門家が名を連ねており、ＹＭＣＡの取り組みに対する研究領域からの期待も大きかったことが伺われる。セミナーは大盛況で神田会館の玄関ホール脇の会場には立ち見が溢れていた（この講演集を出版していたら、どれだけ貴重な書籍になったかと、今でも悔やまれる）。そして、なにより、発達障がいのある子を持つ親たちの大きな期待の中でクラス開設に向けての準備が進められていった。

クラス名はスーパーバイザーである上野一彦氏によって「ＡＳＣＡ（アスカ）」と決まった。Ａはacademic skills：アカデミックスキル（学力）、Ｓはsocial skills：ソーシャルスキル（社会性）、Ｃはcommunication skills：コミュニケーションスキル（伝達能力）、最後のＡはassociation（それらをつなげること、仲間作りをする場）という意味が込められている。これらが、発達障がいのある子の育ちを支える主要な領域である。こうしたスキルを身につけるクラスを作るというのがＹＭＣＡの発達障がい支援の一つの方向性である。

こうした準備の中で専門家集団の組織立てが必要になり、その役割を主任講師として私が担うことになったのである。しかし、キャンプなどの野外活動しかＹＭＣＡの仕事を知らない私としては戸惑うことばかりであった。特に、専門機関でもないＹＭＣＡが専門的な支援を行うわけだから、内から外から、かすかな疑問視の雰囲気の存在を感じ、そうした中で私の悩みは大きかった。そんなときにＹＭＣＡの歴史の中には、てんかんのある子へのプール指導、自閉症のある子のキャンプなど、専門家と組んで当時はまだ公教育では取り組めないままでいた多くのチャレンジがあり、その実績の上に公教育への導入と、今日のごく当たり前の実践があるという話を、どなたかがしてくれたことで視界が開けた。

当時の発達障がいについての公教育での支援は、啓発の段階に留まっており、具体的支援の方法論についての集積が全くなかった。この分野を開拓し世に提示できれば、ＹＭＣＡが自分たちと出会う子どもだけでなく、これから、つまずきに苦しい思いをする子どもたち、そして、その子を育てる親たちの苦悩を軽減できるはずである。ＡＳＣＡでの実績をあますことなく開示し、それを真似する場所がたくさんできることで、ＹＭＣＡらしい在り方が達成できるはずだと。

そして、平成19年度の法律の改正でようやく、いわゆる「発達障がい」と言われるＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症の３つの障がいが、日本の障がい児教育の対象として正式に認められることになった。ＹＭＣＡが試行錯誤的に専門的視点に立つ教育支援を開始してから12年後のことである。今、多くの公教育の現場では、ソーシャルスキルトレーニングをはじめとするＹＭＣＡで独自に開発した方法論を展開している。大学教員となった私がスーパーバイズを請われ公立小学校に出向くと、障がい児クラスの中で、ＡＳＣＡで開発したエクササイズが、そうとは知らずに普通に実施されているところに出会った。

ＹＭＣＡの願い

西東京センター主任主事　井口　真

ＹＭＣＡで、障がい児のキャンプが最初に行われたのは、１９５３年の余島（神戸ＹＭＣＡ）でした。以来１年も途切れることなく、障がい児・者のための活動が続けられています。

東京ＹＭＣＡの障がい児・者プログラムは、その対象と時代から、大きく三つに分けることが出来ます。

①１９５０年～60年代は主に肢体不自由児のためのキャンプが行われ、②70年代以降、知的障がいをお持ちの方々の活動が始まっていきました。③90年代からは、それまで知られることのなかった発達障がいの方々のための支援プログラムが広がっていきました。

ＹＭＣＡのプログラムには共通した特色があります。それは、神様の前にあって、人はかけがえのない価値と限りない可能性をもっているというキリストの精神に根ざしていることです。参加者は、自然に親しみ、共に出会い、誰も軽んじられない環境の中で、主体的にチャレンジしていく。そしてそこには全てを受け止め見守る指導者がいる。これがＹＭＣＡのプログラムです。誰も軽んじられない環境の中で、一人ひとりの生を大切に過ごしてほしいと願っています。

また、このプログラムには３つの対象があると考えています。

①　障がい当事者です。彼らにとっては、ＹＭＣＡは「障がいそのものによる困難を乗り越えていく術を学ぶ」場であったり、ボランティアがいることで余暇を満喫できる貴重な「余暇活動＝ReCreation＝再創造」の場であったり、他人からどう思われているかが分かるが故に自分を好きになれず、引っ込み思案になりがちな人たちが、「自分でもいいんじゃないか」と思える居場所であったりします。彼らにとってかけがえのない場所になることは、ＹＭＣＡの大切な願いです。

②　保護者や家族です。保護者は、子どもが小さい頃から、周囲に迷惑をかけていないかと心配していることが多いです。目が離せないことも多く、自分の時間など諦めている方もあります。「ＹＭＣＡだから安心」「ちょっとほっとできる時間、他の家族に愛情を注ぐ時間がとれる」と思った夢とミッションが、すでに実現していることに、驚くとともに感慨深い。

今後も、ＡＳＣＡクラスはＹＭＣＡの持つ使命とともに、専門的視点で創造と発信を続けて行ってほしいと思う。それが子どもたちの未来を作るはずである。

りする。我々が目指してきていただければ幸いです。

③　三つ目の対象者はボランティアリーダーです。あるボランティアは言いました。「昔は障がい者と自分の間には、線が引かれていると思っていた。でも、ＹＭＣＡに関わってその線は、ずっと向こうの方に押しやられてしまった」。そうして、自らリーダー募集のポスターを書き、そこに「心の視野が広がる」と書きこみました。頭で理解するのではなく、感じることがあります。そうやって人が育っていくのです。

◇　◇　◇

保護者からは、「普段は口の重い子なのにＹＭＣＡから帰ってくるとよく話し、嬉しく思います」「ＹＭＣＡは生活の一部」（毎週プールに10年以上参加の方）「やっとここ（ＹＭＣＡ）にたどり着いたという感じ」といった声が聞かれます。嬉しいことです。一方、「（わが子は）いつも背中に力が入っているのが分かる。夜寝るときも眠りが浅く、誰かの手を巻きつけないと眠れない」とか「歯医者では、身体を診察台に縛っている。床屋では、椅子の後ろから羽交い絞めにしていた。ひどく暴れて親子で髪の毛だらけになりながら髪を切った」といった話も聞きます。私たちは、障がい当事者の心と身体の傍にいつも寄り添うことを旨としますが、同時にこうしたご家族の気持ちにも寄り添っていきたいのです。

◇　◇　◇

ＹＭＣＡでは、「障害」とは表記せず「障がい」と書きます。差し障りがあって害になる人なんていないからです。私の経験でも、むしろまったく反対のことが多かったと思います。私はさまざまな障がいを持った方々と活動を共にするたびに、自分が癒され、励まされるような気持ちがするのです。様々な「生きにくさ」を持つ方々と一緒に生きるとき、社会福祉（社会の中の福祉部分）ではなく、福祉社会（社会自体が福祉である）を目指していくことが出来るのではないかと考えています。

「私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。」（１９９６年改訂　日本ＹＭＣＡ基本原則より）

熱い夏の間には、様々なことがあります。甲子園での高校野球、夏祭り、花火大会、キャンプ、ビアガーデンなどなど。日本の８月では「敗戦記念日」を忘れてはならないでしょう。66年前の８月15日に長い15年戦争が終わり、日本人は二度と戦争をしないことを誓ったのです。多くの過ちの結果として、貴重な憲法９条を手に入れました。

すべての人を一つにしてください

平和で持続可能な社会を

今回の東日本大震災はその終戦の時にも似た大きな歴史の転換点を私たちにもたらしたと言われています。新しい時代が始まるともいわれていますが、そうなるためには、私たち現代に生きる市民に課せられた大きな課題です。平和で、且つ持続可能な社会を創っていく義務と責任があります。日本ＹＭＣＡ基本原則流に言えば「次世代のこどもたちに対する責任を認識しつつ」となるのでしょうか。

この後の世界がどのように変わっていくかは、私たち現代に生きるようにということで「平安がありますように」とも訳されます。神様が私たちと共にある時に平安と平和があるという理解をしたいのです。人間のエゴで同じ人間を、地球を傷つけてはならないのです。二度と過ちは許されません、壊れた命と自然は永遠に還らないのですから。

（総主事　廣田光司）

ヘブライ語で「シャローム」という言葉があります。神が共にありますように

赤▽三角

『ヨハネによる福音書』に次の聖句がある。「この人が生まれつき目の見えないのはだれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」。イエスは答えて言った。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。そして、直ちに癒しの業を行ったとある▼ＹＭＣＡは多くの障がい児・者の支援の活動を行っている。保護者も子どもたちとの多くの苦しみを乗り越え、笑いながら共にやってくる。子どもたちも早くプログラムに参加したいと1時間も前から来ていたり、ボランティアリーダーも子どもたちに会いたくて授業はサボった日でもＹＭＣＡにやってくる。リーダーからほめられて頑張る我が子を見、いつも叱ってばかりいるお母さんの頬には一筋の涙が光っている▼週に1回の活動でしかないが、スタッフまでが子どもたちから優しさをもらい、優しい自分になって癒されてプログラムを終わる。健康的にも情緒的にも不安になっていた親子がぱーっと明るくなって帰っていく。いのちが輝いている場がここにある。皆の心が見える深い関係性を共有できる人間同士って良いなーと感じる▼あまりにも平凡なＹＭＣＡの活動ではあるがイエスの言う「神の業」が活動の中に現れている。最も小さい者たちが絆で結ばれたコミュニティーが形成されている。

（副総主事　堀口廣司）

＜特集＞東京ＹＭＣＡの障がい児・者活動

”みんな生き生き”を目指して

知的障がい児・者 スポーツ

フィットネスクラス、フィットくらぶ

父母も参加、全国大会も出場

「フィットネスクラス」は、１９７８年から33年間にわたり、知的障がいを持つ子どもを対象に運動能力の向上や社会性の発達を目指して、さまざまなスポーツ活動・野外活動を行っている。このプログラムの特徴の一つは、父母、特に父親がプログラムに参加することを重視している点である。これは、スポーツを楽しむための動機づけを高め、学習効果を定着させるだけでなく、家族で楽しくスポーツを行い、汗を流すことによって、子どもに対する家庭の教育的機能を高めることにもなる。親はスポーツの指導方法、指導内容について理解を深める一方で、ボランティア・リーダーは親と接することから子どもたちに関するさまざまな課題を見極め、よき理解者として指導に関われるようになり、ボランティア・リーダーの育成の場となっている。その結果、保護者同志の交流、情報交換も盛んに行われ、スタッフ・リーダーと保護者の共感的関係が一層深まっている。

参加メンバーの運動技能が向上するに従い、水泳をはじめ、バスケットボール・サッカー・バレーボール・卓球・ジョギングなど種目も増加していく。サマーキャンプ、スキーキャンプ等でも多くの種目にチャレンジし楽しんでいる。長年継続し、そのまま18歳以上対象の「フィットくらぶ」に通ってくる方も多い。

「フィットくらぶ」では近年、特に水泳とスキーに於いて、ジャパンパラリンピック競技大会、障がい者の全国大会、国際大会などで、多くのメンバーが選考基準をクリアし、選手として大活躍している。

また毎年、多くの一般市民ランナーと共に、ＹＭＣＡチャリティーランを初め、江東区シーサイドマラソン、谷川真理駅伝、東京マラソンにもチャレンジしている。ホノルルマラソンも全員完走した。

これらは皆、多くのボランティアの協力・支援をいただいて成立っている。

メンバーは、非常に真面目に学校生活や仕事をし、目標に向かって日頃のトレーニングに励み、懸命に生きている。彼らと家族にとって、継続することが「生きる力」ともなっている。今後も活動を継続することは不可欠であり、変わらぬご理解・ご協力をお願いしたい。

（社会体育・保育専門学校、東陽町センター講師　及川栄子・新井静）

新潟県越後湯沢でのスキーキャンプ

山中湖でのサマーキャンプ

知的障がい者 余暇活動

あおぞら・つばさの会

20～30代の余暇活動

「あおぞら・つばさの会」は、１９７９年に「あおぞらの会」として武蔵野ＹＭＣＡに誕生した。活動の目的は、参加者の余暇の充実、お預かりすることによってその他の家族間の時間を作ること、またボランティアリーダーたちが障がいを持った方と出会い、理解者を増やし、お互いに暮らしやすい社会に近づけていくことである。

現在は20代から30代の参加者が多く、長年継続している方も多い。彼らの多くは養護学校を卒業後、作業所や一般企業で働きに出るが、それに伴い仕事以外の余暇を楽しく過ごすような機会が少なくなる。そのため本会のような成人までの活動はニーズが高い。

月１回の日曜、年に２回の１泊会、サマーキャンプ、スキーキャンプなどを企画し、近くの公園でのんびり過ごしたり、バーベキューやハイキングにも行く。参加者１人に対しボランティアが１人つくマンツーマンで行い、グループを組んで活動はするが、本人の意向を尊重した過ごし方をしている。音楽が好きな人も多く、カラオケを一緒に楽しんだり、食べ歩きやボウリングで盛り上がる。言葉での表現はなくても、表情を見れば満足げで嬉しそうなのがわかる。参加者よりも若い年齢のボランティアたちは、毎月の活動の積み重ねの中で相手を少しずつ理解し、そして理解してもらい通じあえた瞬間が喜びだと語る。保護者の方の理解や協力も厚く、そのことがなければこれほど長い間活動を継続することは難しかったであろう。そして、長年関わっている社会人ボランティアも多くいる。彼らの人生と共に歩む人がいることがこの活動のすばらしさである。

（西東京センター　岡田ナスカ）

発達障がい児 学習支援等

ＡＳＣＡ（アスカ）クラス

特性に合わせ　意欲を育む

「発達障がい」のある子どもたちは、様々な個性があり、学び方もそれぞれ異なる。その個性や学び方が周囲から理解されないと、学習や対人関係などで一生懸命やってもうまくいかない経験が積み重なり、自信をなくしたり、周囲と関わることが困難になったりすることもある。「発達障がい」のある子どもたちにとって、安心して主体的に参加できる環境の中で、周囲と関わる意欲を育んでいけることが大切である。そして、その中で社会的経験を積み重ね、自分に合った学び方や周囲との関わり方を見つけていくことが必要である。

ＡＳＣＡクラスでは、ＬＤ・ＡＤＨＤ・アスペルガー症候群やその周辺のつまずきや問題のある小学生・中学生の子どもたちを対象に、学習指導や社会性指導を行っている。学習指導では、基礎学力における特有のつまずきに対して、子ども一人ひとりが自分の特性にあった学習方法を身につけ、それを自分自身で活用できるよう指導している。社会性指導では、友人関係や集団活動でのつまずきに対して、小集団での活動によるソーシャルスキルの獲得と社会的経験の積み上げによって、子どもたちが自分らしく周囲と関われるよう指導している。

この他にも、「発達障がい」の理解啓発を目的とした講演会を年１回実施している。この講演会はチャリティーランからの支援をいただいて開催しており、毎年多くの保護者や指導者と一緒に、「発達障がい」のある子どもたちをどのように理解し支援していくか、考えを深める機会となっている。

（ＡＳＣＡクラス主任講師　飯利知恵子）

肢体不自由児 キャンプ

手足の不自由な子どものキャンプ

55年間、医師などの協力により

野外料理に挑戦！

「手足の不自由な子どものキャンプ」は文字通り、手足（肢体）に障がいを持つ子どもたちを対象としているキャンプである。東京ＹＭＣＡ、（財）毎日新聞東京社会事業団、（社福）日本肢体不自由児協会の主催で、本年第55回を東京ＹＭＣＡ山中湖センターで迎える。８月14日から19日までの５泊６日。小学校３年生から高校３年生までのキャンパーが、５～６名のキャンパーに４～５名のスタッフリーダーが寝食を共にしながら生活をするのが基本である。カヌーやハイキング、水泳、野外調理などグループ活動を中心とした様々なアクティビティを楽しみ、本格的な組織キャンプを目指している。

始まりは１９５７年。手足の不自由な子どもにこそキャンプが必要との「日本キリスト教奉仕団」女子職員の呼びかけをきっかけとしてこの営みはスタートした。

東京大学整形外科教室等の協力を受けながら、第１回は富津海岸でもたれた。以後観音崎キャンプを経て、山中湖に落ち着く。当時の参加者の多くはポリオ（小児麻痺）の子どもたちであった。

当初、参加者の募集に対象者のご家庭を一軒一軒回ったとのことである。すると、大半のところでは「うちにはそんな子はいません！」と玄関を閉められたという話である。時代の違いを感じさせられる。

現在の参加者の障がいは、脳性まひ、二分脊椎等々多岐にわたる。それだけに医療スタッフの充実は言うまでもなく、整形外科、小児科の医師、看護師等が常駐しながらキャンプに当たっている。

障がいの重度化・多様化・重複化は、ボランティアの世界にも深刻な問題を投げかけている。１９８８年にはキャンパーの数と指導者の数が逆転した。それまでは指導者数はキャンパーの約半数であったが、現在では50～60名の参加者に１００名近いスタッフが求められるようになった。しかし、学生たちの夏休みへの試験のずれ込み等によって募集に苦労しているのが現状である。他の障がい児・者キャンプも同様だろうが、参加希望者は多いのに（指導者不足で）連れて行けないということが大きな課題である。

しかし、「キャンプで成長をすべての人々に」目指す時、必ず超えなければいけない壁でもあろう。

（学校法人東京ＹＭＣＡ学院　学院長　飯　忍）

シリーズ 資料室の窓から〈75〉

Ａ４革命の現場

本会元副総主事　齊藤　實

たった一枚の文書も、歴史の一齣を示す貴重品として、東京ＹＭＣＡは角２型封筒で作った「山根式袋ファイル」に収めて資料室で保存している。クラフト紙の角２型封筒は１００枚５８０円と安い。関係団体から郵送されたものを使えば、材料費はタダである。届いた封筒には、住所や電話番号など必要情報が印刷されていて、連絡に住所録を取り出す必要はない。ノンフィクション作家山根一眞が１９７５年に個人データベースとして創案したこの手法を私は日本経済新聞社刊の山根著『情報の仕事術・２・整理』で知った。１９８９年夏であった。自宅での記録類整理に直ちに使い、勤務先では、人事管理ファイルとなった。当時一橋大学教授であった野口悠紀雄はこの「山根式」が「五十音」順に書棚に並べるのを面倒だとして使用法を変え、中公新書『「超」整理法』に発表した。整理法開発競争の開幕であった。

東京ＹＭＣＡ百年史を書いた頃は、この手法はまだ世に出ていない。だから、資料収集は専らカードであった。梅棹忠夫の１９６９年刊岩波新書『知的生産の技術』で知ったＢ６「京大式カード」を大量に用いた。山根一眞もその頃はＢ６派だったのか、革製Ｂ６判システムバインダー「ＭＡＧＯ－ＮＯＴＥ」を考案発売した。バイブル判システム手帳と同じ規格の６穴で、「マゴノート」と読むか「孫の手」と読むか。痒いところに手が届く文具である。伊勢丹の鞄売り場で一連の山根考案グッズと一緒に購入した。私の文具遍歴の記念品である。その彼が、１９９３年７月になると『スーパー書斎の整理術・Ａ４革命』を日本経済新聞社から出版した。政府が同年４月に行政文書のＡ４統一に踏み切った直後であった。ここにも「山根式袋ファイル」が詳しい。

自宅では、大きさの違うテレビ修理伝票も入院記録も、この「山根式袋ファイル」で保管している。多規格の書類も、Ａ４袋ファイルで規格が揃う。Ａ４革命なのである。

発達障がい児
野外活動

Smile（すみれ）
自信をもって　チャレンジして

西東京コミュニティーセンターの「Smile（すみれ）」は、発達障がいと呼ばれる課題を持った小学生から高校生を対象にした野外活動である。月に一回の活動では、自然豊かな公園や川での活動の他、調理体験やサマーキャンプ、街散策などのプログラムを行っている。

「Smile」の活動に参加している子どもたちに共通していることは、障がいを持っているためになかなか理解されず、友達ができない、周りから認めてもらえないというような経験をしてきていることである。そのために、自分のことを好きになれない、引っ込み思案になるというような場合が多くみられる。

「Smile」では、全体をいくつかのグループに分けて活動しているが、だいたい5人の子どもたちに対し、2人から3人のボランティアリーダーがつき、共に過ごしている。彼らは専門的な知識を持つわけではないのだが、子どもたちの気持ちに寄り添い、じっくりと向き合いながら活動を共にしている。このような環境のなかでそれぞれの子どもたちは、徐々に安心を示し、グループの中に自分の居場所を感じることができたり、同じグループの仲間と関わり合うことで、自信をつけたり、チャレンジしたりという姿を少しずつ見せてくれる。

「Smile」の子どもたちの多くが、自分の感情や興味に対してとても素直であり、そのような姿から小さな幸せに気づかされることが多くある。このような子どもたちの、ありのままを受け入れ、彼らの居場所となり、仲間づくりやチャレンジできる環境を提供するために、ボランティアリーダーたちの存在は欠かせない。そして今後もそのような環境を提供し続ける場として「Smile」が存在し続けられればと思う。

（西東京センター　村山達哉）

知的障がい児
水　泳

ビーバークラス
興味に寄り添って指導

山手センターでは、毎週土曜日に特別支援プールクラスを行っている。主に自閉症を始め、ダウン症や広汎性発達障がい、軽度発達障がいの子どもたちが在籍している。小1から小4までをビーバークラス、小4から中3までをビッグビーバークラスと呼んでいる。

通常のスイミングスクールでは、水に浮けるようになったらバタ足をし、クロールができたら背泳ぎするといったように、決められた順番に従って一つずつステップアップしていくが、このクラスは出来ることからチャレンジしていく。顔を水につけるのを嫌がる子には、もぐる練習ばかりを無理強いせず、ビート板を使って、バタ足をやってみる。あるいは浮き具を使ってクロールの手だけやってみる。一般的な指導計画にとらわれず、いろんなことをやってみる中で、一人ひとりの興味を見出し、個々のスキルに合わせて指導していく。そのため指導は、ほぼマンツーマン体制で行っており、たくさんのボランティアリーダーや社会体育・保育専門学校の実習生が活躍している。

またこのクラスでは、泳力の向上だけを目標とせず、指導を行うリーダーたちとの関わりも大切にしている。様々な人との関わりを通して、社会でのルールなど、社会性も身につけていけるように心がけている。

毎週土曜日が待ち遠しいという子どもも多い。ＹＭＣＡのプールが子どもたちにとっての新たな居場所となり、１人ひとりの可能性を少しでも引き出し、様々な体験ができることを願っている。

（山手センター　池田峻也）

グランチャ東雲　登録1万人超

芽生え始めた「交流」の輪

生島ヒロシ氏（ＴＢＳキャスター）による記念講演会「いつまでも美しく生きる秘訣」

今年4月にオープンした江東区児童・高齢者総合施設「グランチャ東雲」は、東日本大震災の影響を受け4月は営業時間の短縮、実施事業の中止などで粛々と運営されていたが、3ヶ月を経た現在、順調に利用者を増やしている。登録者はすでに1万1500名を超え、毎日400名以上の高齢者や子どもたちが施設を利用している。

去る6月25日（土）には生島ヒロシさんによる記念講演会「いつまでも若く生きる秘訣」が開催され、201名の参加者で会場は満員御礼の状態となった。中にはグランチャ東雲近隣の国家公務員宿舎に避難されている福島県の方も20名ほどいらした。生島ヒロシさん自身も気仙沼の出身でありご家族の安否が未だ分からない中、被災者の皆さんに心を配りながら、それでも歌あり笑いありと、楽しく為になる講演会となった。

◇　◇　◇

館内では毎日沢山のプログラムが実施されている。高齢者向けの講習会で大人気なのはパソコンや英語にチャレンジというものや、カラオケ講座などと多種多様だ。また、健康プログラムも大盛況で、特にプールのアクアビクスや水中ウォーキングなどの人気が高い。土日のプールは入場制限をしなければならないほどの人気である。介護予防のプログラムも質の高さで徐々に参加者が増えている。また、嬉しいことに利用者の中からボランティアで子どもたちへ絵本の読み聞かせや、おもちゃの修理などを行ってくださる方も出てきて、徐々に児童と高齢者の交流の輪が広がっていることを実感する。

3階のスペースランド（大型遊具）で遊ぶ子どもたちの声が響きわたる中、囲碁や将棋を楽しむ高齢者がいる。今後はＹＭＣＡならではの人と人を繋ぐ手法を駆使し、より自然に高齢者と子どもたち、保護者が交流する姿が館内で見受けられるようになることを願っている。

（館長　沖　利柯）

しののめＹＭＣＡこども園

「信頼」の芽、着実に

4月から開園した「しののめＹＭＣＡこども園」は、『信頼』をテーマとして掲げている。入園式やその後組織化された保護者会（おひさま会）等で、そのテーマに込められた願いや想いを伝え、保護者の皆様と共に、その実現に向かって進めてきた。そのテーマでは三つの有るべき姿をイメージした。

まずはじめの姿は「園児たちが笑顔で登園する姿」である。4月当初は不安があり、泣きながら登園する園児や、保護者からなかなか離れることが出来ない園児もいたが、今では遠くの歩道から、笑顔で元気に走って来てくれる園児が増えた。安心できそして自分の居場所として、こども園が受け入れられたと感じる。

しののめＹＭＣＡこども園　砂遊び

次の姿は「保護者と教職員が自然に語り合う姿」である。6月に行われるお誕生会への招待、保育参観日、毎月行われる全体保護者会などの機会を多くし、園児たちの様子や教職員の姿を見てもらうよう心がけた。このようなことを通じ、十分とは言えないが、保護者と教職員の信頼関係が築かれ自然に語り合う姿が見られるようになってきた。3つ目の姿は「教職員と保護者が共に汗を流す姿」である。6月に予定していた「しののめ祭り」は、残念ながら雨天のため中止になってしまったが、おひさま会（保護者会）やお手伝いボランティア募集には約40名の保護者の応募があった。大きな喜びと手ごたえを感じた。まだまだ歩み始めたばかりであるが、これからが益々楽しみである。

（しののめＹＭＣＡこども園　園長　堀江和広）

ソシアスキャンプ
山中湖キャンプで会員35人交流

会員部では、例年秋にソシアスフォーラムを実施して来た。今年は、新入会員募集の意味も含め、楽しむソシアスキャンプを７月に行い、ソシアスフォーラム（会員協議会）を11月26日に計画している。

７月９日（土）・10日（日）の２日間、天気にも恵まれ、35人の参加者を得て、楽しいキャンプを行うことができたので報告する。

廣田総主事奨励の開会礼拝、草分スタッフ指導による、アイスブレーキングの楽しいゲームで雰囲気がもりあがった。忍野八海の清純で冷たい湧水に手をつけ、その後温泉に。夕食後に草分スタッフから「東京ＹＭＣＡと今・野外教育とＹＭＣＡ」、齊藤實さんから「山中キャンプ75年の変遷」の話しを聞き、いかに素晴らしく、良い働きを東京ＹＭＣＡがしてきたかを再確認した。Libyのリーダーの指導による、キャンプファイヤーでゲームを楽しんだ。翌朝、素晴らしい天気に恵まれ、雲ひとつない富士山をめでつつグリーンチャペルで朝拝をし、湖岸で記念写真。「ＹＭＣＡと私」と題し、野村三雄さん、唐島悦子さん、上谷喜謙さんによるリレートーク。いかに人生にＹＭＣＡ体験がかかわっていたかを聞いた。高橋伸さん指導による、KUBB（クッブ）ゲームを庭で、皆童心に返って楽しんだ。参加者の感想の一部を紹介しますが、皆さん本当に楽しかったと。

・Ｙのキャンプは数十年ぶり。十分に楽しい有意義な時を過ごしました。ＹＭＣＡ経験豊富な方々に貴重な体験談をお聞きできたことも、今回のキャンプの収穫です。

・久々に楽しいキャンプ生活をさせていただき感謝です。来て良かった。

・ＹＭＣＡは人のつながりが財産であることを改めて感じた。

来年は、是非ご一緒に参加し楽しみましょう。

（会員部運営委員長　笈川光郎）

東京ＹＭＣＡの障がい児・者活動一覧

活動名	年齢	対象者	活動概要	実施
ＡＳＣＡクラス	小１～中３	発達障がい児及びその周辺児	学習指導・社会性指導	東陽町
ＡＳＣＡクラス	小１～高３		社会性指導	西東京
シャボン玉	小１～中３	知的障がい児・者	定例野外活動（月１回） サマーキャンプ スキーキャンプ	山手
あおぞら・つばさの会	中１～成人			西東京
シャベルズ・いづみの会	小１～成人			西東京
はらっぱ	中１～高３	発達障がい児及びその周辺児		山手
きらきら	小１～小６			山手
Ｓｍｉｌｅ（スミレ）	小１～高３			西東京
Ｓｍｉｌｅ野外活動	小１～小６			東陽町
Ｓｍｉｌｅ運動教室	小１～中３	発達障がい児及びその周辺児	運動（週１回）	東陽町
フィットネスクラスＡ	小学生	知的障がい児・者	水泳＋各種スポーツ（週１回） 各種大会への参加、キャンプ	東陽町
フィットネスクラスＢ	中高生			
フィットくらぶ	１８歳以上			
ラッコ	小１～中３	知的障がい児・者	水泳（週１回）	山手
ビーバー	小１～小４			山手
ビッグビーバー	小４～中３			山手
まんたの会	小１～成人			西東京
フレンドシップキャンプ	小３～高３	肢体不自由児と健常児	ＮＰＯフレンドシップキャンプ主催、東京ＹＭＣＡは指導者派遣	
手足の不自由な子どものキャンプ	小３～高３	肢体不自由児	肢体不自由児協会、東京ＹＭＣＡ、毎日新聞東京社会事業団の３団体が主催	
秋の山中湖キャンプ	小１～高３	発達障がい児及びその周辺児	三菱商事株式会社協働	
かめの子キャンプ	小１～成人	知的障がい児・者	サマーキャンプ	西東京
のびのびキャンプ	小１～高３	発達障がい児及びその周辺児	スキーキャンプ	全東京Ｙ
おひさまキャンプ	小１～小６	発達障がい児及びその周辺児	サマーキャンプ	全東京Ｙ
チャレンジスキー合宿	小１～成人	障がい児・者と健常児	スキーキャンプ	西東京

いんふぉめーしょん　INFORMATION　インフォメーション

■早天祈祷会■

日　時：9月1日(木)7:30〜9:00
奨励者：李明忠氏
　(在日大韓基督教会横浜教会牧師)
会　場：在日韓国YMCA（水道橋）
お問合せ：会員部
　(Tel.03―3615―5568)

■中国語の聖書に親しむ会■

日　時：9月12日(月)18:30〜20:30
会　場：山手センター
指　導：仲田達男氏(元財団理事長)
参加費：無　料
お問合せ：会員部
　(Tel 03―3615―5568)

■午　餐　会■

<文化講演会ー昼食をともに>
日　時：8月26日(金)12:00〜13:30
会　場：東京大学YMCA
　(東京メトロ南北線東大前駅)
テーマ：「核兵器のない　平和な世界をつくるために」
卓話者：スティーブン・リーパー氏
　(広島平和文化センター理事長)
参加費：3,000円(食事なし1,500円)
お申込み：賛助会事務局
　(Tel 03―3615―5568)

■旧約聖書に親しもう■

<キリスト教相互理解セミナー>
日　時：9月22日(木)18:30〜20:30
会　場：山手センター
指導予定者：秋山昇牧師(キリスト教ガリラヤ福音教団)
参加費：無　料
お問合せ：会員部
　(Tel 03―3615―5568)

■チャリティーラン■

東京YMCAインターナショナルチャリティーランは、障がい児・者活動を支援するための駅伝大会です。昨年は84チーム504人が参加。運営ボランティアは254人でした。今年も多くの方のご参加・ご協力をお待ちしています。
日　時：9月23日(金・祝)
場　所：都立木場公園
お問合せ：会員部
　(Tel 03―3615―5568)

■東京ＹＭＣＡ夏まつり■

恒例のオール東京ＹＭＣＡ夏まつりを開催します。模擬店、子どもコーナー、抽選会、ジャズバンド演奏、被災地物産販売など盛りだくさん。どなたでもお楽しみいただけます。ぜひお誘い合わせの上、お出かけください。
日　時：8月27日(土)14:30〜18:00
会　場：東陽町センター
　＊お手伝いボランティアも募集中
お問合わせ：会員部
　(Tel 03―3615―5568)

■国際協力一斉街頭募金■

恒例の国際協力一斉街頭募金を実施します。毎年、東京ＹＭＣＡの会員・学生・園児・ワイズメンなどが300人以上参加し、渋谷駅前で一斉に街頭募金を行っています。今年もご参加をお願いします。

寄せられた募金は、東京ＹＭＣＡが行う国際協力・国際交流プロジェクトに用いられます。
日　時：9月10日(土)10：00〜
場　所：渋谷駅周辺
お問合せ：国際協力部
　(Te103―3615―5548)

2011年6月新人・継続会員

新入会員・再入会　8名
継続会員　63名
会員総数　832名
（センター別、敬称略）

◆会員部
【継続】宇田川泰弘　尾崎　哲則　樫村　弘子　樫村　好夫　鴈野　晶子　熊井　宏之　熊沢　久子　越塚　眞行　小林　正幸　齊藤　希世　島田　茂　高津　達夫　高橋　伸　仲田　達男　布上　信子　花井　雅男　林　寿夫　松田　俊彦　松本　倫子　松本　良三　桃井　明男　矢島　清行

◆江東センター
【継続】飯岡　洋介　飯嶋　晨允　市﨑　俊一　興津　夏子　鈴木　雅博　高橋　里香　田口　友勇　柳沢　広繁

◆山手センター
【継続】青鹿　博明　赤沼　正章　伊丹　豊子　浦田　大　開原　久代　小宮　恭子　佐々木啓祐　田附　和久　筒井　康　羽賀　伸子　伊藤　径

◆西東京センター
【継続】小口多津子　五味　宣子　住田　学　田中　慶子　宮内　友弥　八尾　勝

◆南センター
【継続】尾嵜　敦子　小久保薫子　唐島　悦子　堀井　堯　前山　昭子　村上　卓

◆東陽町センター
【新入】方山　哲司
【継続】石井　英典　入倉　幹　小山　芳江　茅野　徹郎

◆山中湖センター
【継続】上原　奈奈　長津　徹

◆上信越野外活動センター
【継続】斉藤　章

◆国際ホテル専門学校
【継続】小野　洋子

◆社会体育・保育専門学校
【継続】澤栗　勝人

◆しののめＹＭＣＡこども園・グランチャ東雲
【新入】市川　望美　具志堅　敦　川上　利恵　小宮　優子　竹田　愛　宮﨑　純
【継続】木村　卓司

東京ＹＭＣＡ賛助会　継続法人会員登録数

2011年6月　158法人

感謝

【6月】
木村農産商事株式会社／株式会社東京オール／株式会社トップナッチツーリスト／東新重機販売株式会社

日本宝くじ協会より、テントを2張寄贈いただきました。

財団人事

〈採用〉
7月1日付　児童福祉職
岩﨑　日和（オリーブ保育園）
降旗　優子（芝浦こども園）
増野日弥子（キャナルコート）

学法人事

〈採用〉
7月1日付
橋本　晶恵（しののめＹＭＣＡこども園・教諭）

【訂正】

本紙6月号「感謝」に以下の間違いがありました。お詫びして訂正します。
〔正〕　東京むかでワイズメンズクラブより50周年を記念して野尻学荘のために50万円
〔誤〕　東京世田谷ワイズメンズクラブより50周年を記念して野尻学荘のために50万円

インターナショナルデー

英語で、世界を体験

東陽町語学教育センターでは7月16日に「インターナショナルデー」を実施し、幼児から小学生までの子どもたちとその保護者約150人、講師13人、ボランティア18人の総勢約180人が参加した。子どもたちに英語で異文化に触れる楽しさを体験してもらいたいという趣旨で企画したイベントで、今回で3年目となった。

会場では日本、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、ネパール、フィリピン、マケドニアの講師陣や、インターナショナルスクール・TYISのスタッフがそれぞれブースを設け、出身国の食べ物やゲーム、クラフト、民族衣装などを英語で紹介した。

「出発ゲート」で「YMCAパスポート」を手にした子どもたちは各ブースでスタンプをもらい、「世界一周」を目指す。フィリピン・ブースではバンブーダンスを習い、オーストラリア・ブースではブーメランやクリケットに挑戦、ネパールブースではネパール語で自分の名前を書いてもらうなど、短時間で世界旅行を味わった。また、日本ブースでは東日本大震災の被災者に向けてメッセージを寄せた。ドキドキしながらも講師に英語で話しかけ、「世界一周」を果たした子どもたちは誇らしげにパスポートを見せてくれた。

最後には参加者全員でミュージカル『アニー』のテーマ曲『Tomorrow』を合唱した。今後子どもたちが困難な状況に置かれることがあっても、世界には共に祈ってくれる仲間がいるということを実感し、その仲間と共に明るい「Tomorrow」を切り拓いていって欲しいと願う。

（東陽町語学教育センター　秋山真輝）

東日本大震災　東京ＹＭＣＡの支援活動

被災者の声を聞き　迅速に

東京ＹＭＣＡが支援する宮城県石巻市及び女川町も蒸し暑い毎日が続いているが、今現在もたくさんの方々が避難所や、かろうじて残った自宅での生活を余儀なくされている。湿気が多く、衛生的な環境が整わない場所もあり、震災発生時に支給された冬用の毛布にはダニが発生するなど問題化している。そこで、タオルケットを被災地へ送る「タオルケットキャンペーン」の呼びかけをしたところ、たくさんの方から新品タオルケットと募金が寄せられ、また企業からもタオルケット献品のご協力があった。被災者の方が少しでも快適な生活が送れるよう、ランタンや電池に合わせて、順次被災地に届けている。

その他、今夏にはいくつかの救援活動が予定されている。まず津波被害の激しかった石巻市で、7月23〜26日、及び8月18〜21日の2期にわたり、ボランティアワークキャンプを実施する。東京ＹＭＣＡの行う救援活動に興味を持った国際ホテル専門学校の学生などが自主的に手を挙げ、夏休みを利用して被災された家屋の洗浄や掃除などのボランティア活動を行う。また、被災されたご家族をご招待し、豊かな自然の中で心身を休めていただきたいと、「のんびり親子リフレッシュキャンプ」を8月5日を最初に5期にわたり妙高高原ロッジで行う。さらに、東京ＹＭＣＡのサマーキャンプやサマースクールに被災した子どもが無料で参加できるように、スカラーシップ制度も設けた。リフレッシュキャンプおよびキッズスカラーシップは、賛助会員である三菱商事株式会社から大きな支援をいただき実現する運びとなった。

東京ＹＭＣＡ会員部運営委員会では、会員と職員が同じ願いのもと、支援活動を継続して推進していくために、「震災復興支援タスクチーム」を立ち上げた。被災地の状況は刻々と変化し、必要な物資や支援のあり方も一定ではない。東京ＹＭＣＡに連なる人たちの知恵と力を結集して、今後も被災者の声を聞き、迅速な支援を行っていきたい。

（会員部　戸坂昇子）

東日本大震災　復興・救援募金のお願い

お預かりしました募金総額は、6月末日時点で12,381,991円になりました。心から感謝申し上げます。引き続き9月末まで募金を受け付けております。ご協力をお願いします。

＊ゆうちょ銀行（郵便振替）　00120―7―714728
　公益財団法人東京ワイエムシイエイ会員事務局
＊みずほ銀行　神田支店（普）1677931
　公益財団法人　東京ワイエムシイエイ
＊三井住友銀行　神田支店（普）7656469
　公益財団法人　東京ワイエムシイエイ
＊現金書留、東京YMCA各部窓口でも承ります

「東日本大震災」とお書き添えください。領収書は、お申し出がない限り、振込控えをもって替えさせていただきます。

高尾の森 わくわくビレッジ
Takaonomori Wakuwaku Village

■第7回　わくわくアートコンテスト
木材をつかった「生き物」をテーマとした立体造形物のコンテスト。世界に一つだけのあなたの作品を募集中です。

応募期間：10月12日必着 ／ **応募方法**：専用の出品票に作品写真を添付の上郵送 ／ **審査**：一次審査、本審査を経て入賞者には11月中旬に結果を通知します。
表彰式：2011年12月10日(土)　最優秀賞 1名(図書券3万円分、副賞)　その他各賞(出品者全員に参加賞)
主催：東京都教育委員会 ・ 高尾の森わくわくビレッジ
協力：東京都図画工作教育研究会 ・ 京王電鉄株式会社 ・ 財団法人東京YMCA

出品票のダウンロードや詳しい内容はホームページやお電話でご確認ください。
高尾の森 わくわくビレッジ　☎ 042-652-0911
高尾の森わくわくビレッジはYMCAスタッフが運営しています
〒193-0821　八王子市川町55
www.wakuwaku-village.com